

京都大学 溝上慎一先生

新しい社会を見据えた 大学教育の変化と「学士力」

特集
インタビュー

全国の大学でキャリア教育、キャリア形成支援が広がるなか、正課教育でも、知識を越えて、総合的な力を養うための教育が検討され始めています。京都大学高等教育研究開発推進センターの溝上慎一先生に、現在の大学教育の課題と学生のキャリア教育について、お話を伺いました。



溝上慎一先生 プロフィール

1970年福岡生まれ
大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了。京都大学高等教育研究開発推進センター・准教授。著書に「現代大学生論—ユニバーシティブルーの風に揺れる」(NHKブックス)、「大学生の学び・入門—大学での勉強は役に立つ!」(有斐閣アルマ)など。最新刊は「自己形成の心理学—他者の森を駆け抜けて自己になる—」(世界思想社)

今ほどの大学でも学生の授業出席率が上がっています。これは学生自身の意識の問題として考えるよりは、本来の姿を作り出してきた、大学改革の成果としてとらえています。

もはや古いノートを読み上げるだけというような授業は少なくなり、教員の側では学生が少しでも興味を持ってくれるような授業に努めています。学生の「授業満足度」は、すでに大学教育のテーマではありません。

現在、大学教育の問題は、大学の「学び」が単なる知識の獲得や伝達を超え、学生のどのような成長につながるのかということなのです。

社会変化と大学教育

以前の日本では、入学した大学や大卒の資格が将来につながり、企業

でもそれらを基準に採用していません。しかし、バブル経済崩壊以降、年功序列賃金や終身雇用制が揺らぎ、中途退職や転職などが一般化するなど、企業の素地が変わりました。大学教育に対しても、「社会人として一歩踏み出せる人材を育ててほしい」という要求があり、経産省から「社会人基礎力」という用語も出され、多くの大学で正課・正課外でキャリア教育、キャリア形成支援が行われるようになりました。

「汎用的技能」を育成する

昨年文科省中央教育審議会の学士課程教育の在り方に関する小委員会から、大学教育は、知識・技能・態



度などの能力を、一体化して育成する必要性が打ち出されました。「学士力」の1つである「汎用的技能」の育成はこれにかかわります。

従来型の講義や演習ではすまないということですが。例えばアメリカの大学では、講義だけで授業が成り立つとは考えず、授業外に課題やレポートを出すことは当たり前です。演習でも、一般的に今の日本の大

学では、その場でできる議論をし、発言しない学生がいてもかまわないような雰囲気があります。そもそも演習とは、講義で習った知識や課題を通して議論していくなかで、実際に理解しているのが問われる、知識とアクションがセットになっている授業であるはずですが。

現代の複雑化した社会の中では、抽象性や体系性というレベルで頭を使わなければならない仕事が増えてきています。また、単純なマニュアルベースの作業でも、課題意識をもって取り組める人と、そうでない人は、はっきりと分かれてきます。

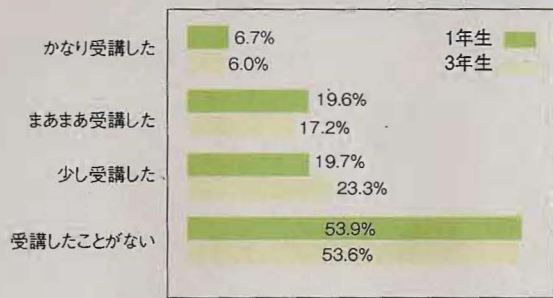
ポイント

POINT

- 正課の大学教育が変わりつつあります
- キャリアデザインは早めに
- 正課・正課外活動のバランスが重要

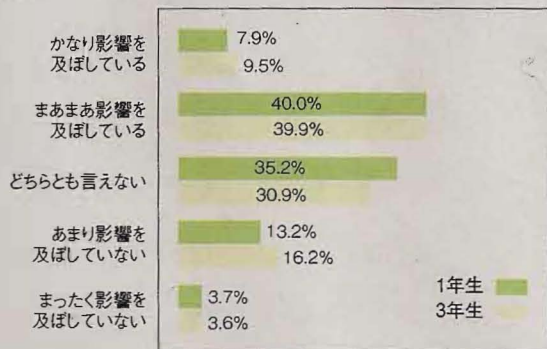
キャリア形成科目への受講

大学で、単位を取得できるキャリア形成科目を受講しましたか？



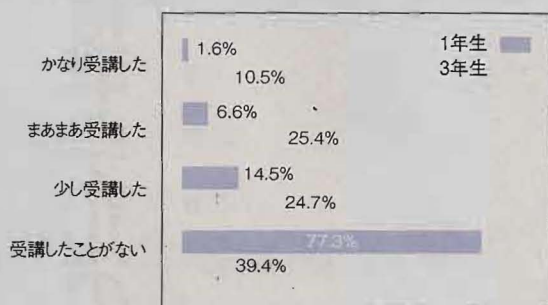
キャリア形成科目参加影響度

受講したキャリア形成科目は、どの程度影響をおよぼしましたか？



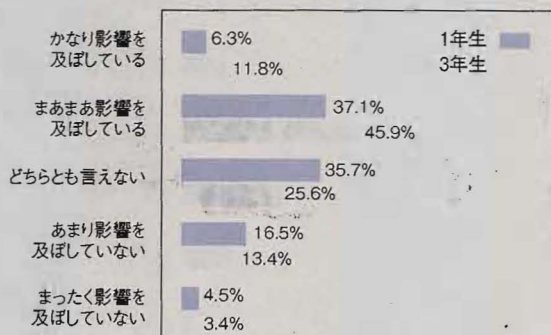
キャリア形成支援セミナーへの受講

大学で、単位とは無関係のキャリア形成支援セミナーや講座を受講しましたか？



キャリア形成支援セミナー参加影響度

受講したキャリア形成科目は、どの程度影響をおよぼしましたか？



※本文中のグラフは「京都大学／電通育英会共同 大学生のキャリア意識調査2007」より転載させていただきました。

任されません。そこで求められているレベルは個性的なものというよりは、しっかりとした文章が書ける、挨拶・コミュニケーションができる、チームで協同作業ができる、そんなことです。

これに短い時間で複数の仕事を次々に仕上げていかないといけない。能力の良さが加わります。問題はそうした技能や態度は、大学をはじめ、大学受験、高校教育でも、いろいろな学校教育の場で求められていることと同じだ、ということ。そんな特別なことではない。

だから、仕事に役立つとかそんなことではなく、将来力強く生きていくための基礎体力をつくる、そう考えればいい。「これは役立つ」とか「役に立たない」とか、知識レベルの関連で考えすぎはいけません。

また、日本の大学はクラブ活動が盛んなことで世界的に知られていて、理科系の研究室が家族ぐるみで学生を面倒見るシステムなども含めて、そうした日本独自の良さも大いに価値を認め残していくべきです。また、学生は大いにそうした機会や環境を利用すればいいと思います。

正課と正課外の
バランス

社会人として一歩踏み出すための知識や力は、大学教育だけでは育てられません。生協の学生委員会や体育会、サークルなどの課外活動も大切です。授業は忙しくなっています。学生たちはうまく時間のやりくりをしています。ここは心配する必要はないし、心配しても仕方がありません。学生たちは置かれた状況のなかで、「よく学び、よく遊ぶ」わけです。

いろいろやっていると、新しいつながりができ、今まで思ってもみなかった世界や新しい課題が出てきて手応えを感じてきます。

そのためには、社会人としての基礎的な力を養う正課・正課外のキャリア教育、キャリア形成支援は大切です。他方、授業を通しての知識・技能・態度の包括的な能力を育成する正課教育があります。どちらも重要な課題で、一方だけが強調されるのではなく、バランスが重要であると考えています。

(編集部)